

# NCS

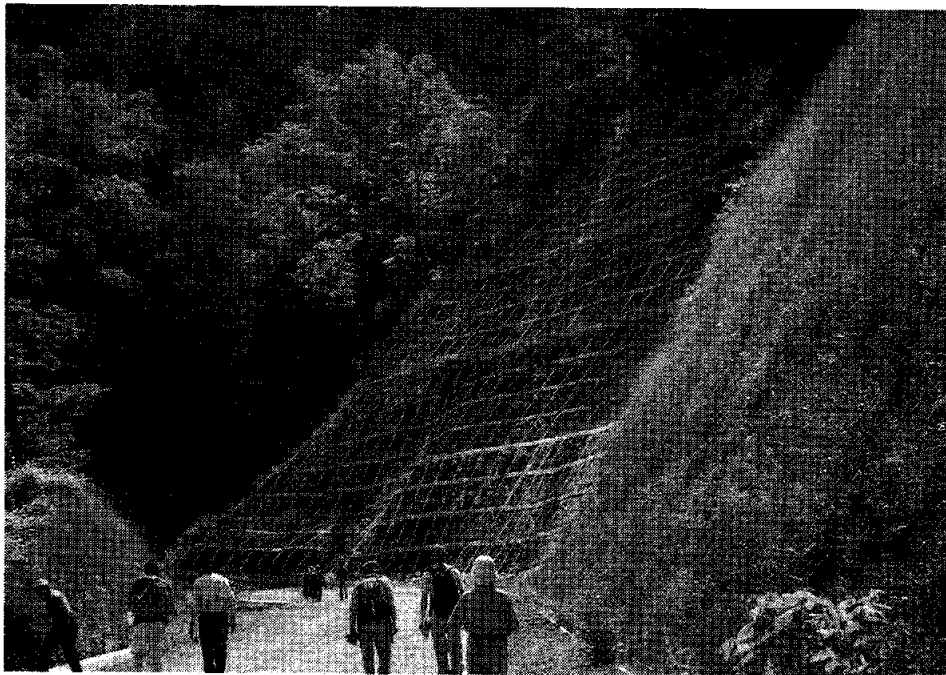
Nature Conservation  
Society of Hokkaido

# HOKKAIDO

2004年10月 NO.123

..... CONTENTS .....

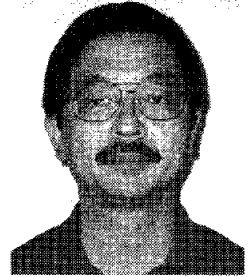
チヨットひとこと.....石川 幸男.....	2	あ・ら・か・る・と.....	10
特集・止めよう！大規模林道.....	3	寄贈図書・佐藤正秀理事を偲ぶ	
藤原 信、小山健二、大谷節子、大久保フヨ		活動日誌・要望書.....	11
エッセイ.....奥谷 浩一.....	7	お知らせコーナー.....	12
北海道各地のニュース.....	8		



北海道森フォーラムの現地視察 滝雄・厚和線 2004・7・25

## 河川の自然再生は河川に委ねるべきだ

わたくしは10年ほど前に、旧建設省の河川水辺の国勢調査のアドバイザーを委嘱され、その縁で、河畔林の再生事業にも関係するようになった。現在は仕事の柱のひとつとして、河畔林再生の基礎となる、本来の河畔林の成立プロセスを調査している。釧路湿原や標津川などで行われている自然再生事業は、形を変えた公共事業だという批判が絶えない。標津川での経験を踏まえ、自然再生のあり方について考えを述べたい。



河畔林再生を目指している標津川下流域では、流路の両側にヤナギ類やケヤマハンノキの河畔林（以下ヤナギ林）が成立し、単調な景観が続いている。これらの林は、できたての若い林から数十年のやや古い林まで、さまざまな林齢のものがある。つまり、現状の直線化された標津川でも、ヤナギ林を成立させるプロセスは存在している。一方、本来の十分に発達した河畔林ではヤチダモやハルニレの林も成立していたはずだが、現実に見られるヤチダモ河畔林は古い林で200年、最も若くても25年程で、それより若い林はほとんどない。まれに、ヤナギ林の下層に若いヤチダモが単木的に定着しているものの、道内各地で見られる、大きさのそろった（つまり樹齢のそろった）構造の森林は、最近20数年は形成されていない可能性が高い。ヤチダモが定着できるのは、河川が自由に蛇行して時々は氾濫を起こすことによって堆積された土砂の上なのだと思うのだが、直線化と河川管理が徹底し、さらに周辺の土地利用が進行したために、定着に適した立地が形成されなくなったのだと考えられる。河川の自然再生とは、河川が樹木の定着立地を形成するこのようなプロセス、つまり河川生態系の自然プロセスを再生することに他ならない。また土砂の運搬だけを考えても、上流から下流への連続性に留意することが不可欠である。しかし、現実に行われている再生の取り組みは、下流の1カ所で実験的な再蛇行化と称して、昔は蛇行していた本川の直線化によって形成された旧川を、強制的に再び本川とつないだだけである。仮にどこかにヤチダモを植栽して林を作ったところで、川が自由な蛇行を制限されているのでは、自然とは切り離された公園のようなものだ。

堤防を全部取り払って、蛇行と氾濫が無制限に起こる環境を作ることだけが自然再生だと言うつもりはない。しかし、流域全体を視野に入れて、河川の自然のプロセスに再生を委ねることが、河川における自然再生の思想の根底にあると強く思う。したがって、できる限り人間の関与の少ない方法で（土木工事的な手法に頼らず）、しかし現実に存在する制約の中で、どこまで自然プロセスに近づけられるかを論議するのでなくては、それぞれの再生工事の合理性が説明できるはずがないのは明らかだ。

（理事・岩見沢市在住）

石川幸男

### ダメなものダメ

宇都宮大学名誉教授 藤原 信

森林開発公団が1956年に発足してから、約50年が経過した。

森林開発公団法は、「熊野川流域および剣山周辺の両地域で奥地開発林道（旧公団林道）を建設する」という時限立法であったが、格好の天下り先を見つけた林野庁は、「旧公団林道」に引き続き、「関連林道事業」「特定森林地域開発林道（スーパー林道）事業」や「水源林造成事業」などを次々と業務に加え、公団の延命を図った。

1967年の特殊法人の改革の時には、「公団は、設立当初の目的はすでに達成している。森林開発公団は廃止すべきである」という第1次意見書が行政管理委員会から提出された。1970年の「当面の行政改革事項に関する意見」でも、「公団の林道建設事業は林野庁または都道府県に移管し、造林事業については林野庁の在り方を含めて抜本的な再検討を行い、改組または廃止すること」という第2次意見書が提出されている。

このような逆風の中で、農林族の後押しにより生き残りをかけての構想が「大規模林業圏開発計画」であり、「大規模林業圏開発林道」事業である。

1999年には、特殊法人等整理合理化計画により、農用地整備公団を併合して、名称を「緑資源公団」と変更した。まさに“焼け太り”である。2002年には独立行政法人となり、名称も「緑資源機構」に変更した。

本年2月に発表された「大規模林道事業の整備のあり方検討委員会」の議事録を見ても「大規模林業圏開発事業」は全く議論されていない。検討対象された20区間のうち、7区間は取り止め、13区間は幅員縮小などの計画変更を行ったとしているが、自然保護団体等が問題としている路線についての見直しは行われていない。幅員の縮小により、環境アセスはずしの意図も見え隠れする。

2004年度予算では、「大規模林業圏開発林道」を「緑資源幹線林道」事業に名称変更するという姑息な手段を講じている。

大規模林道事業により、自然破壊を引き起こし、いまも森林生態系に打撃を与え続けている。大規模林道は中止し、緑資源機構は廃止すべきである。名前を変えても“ダメなものダメ”である。

（森フォーラム資料より抜粋）



（船橋市在住）

現地で説明する藤原氏

## 大規模林道の工事を止めるために反対の声を結集しよう

北海道自然保護連合事務局長 小山健二

1月17日、北海道自然保護協会の大規模林道に関する集会に先立って、「大規模林道問題北海道ネットワーク」の組織が結成された。結成した組織の目的は、工事を止めることにあるが、その日常の活動目的は多くの市民に工事反対の声を広げることにあるのです。なぜなら、北海道の大自然にむだなキズを付ける開発工事はそのほとんどが人知れず山奥の工事で、自然保護団体内部の反対運動だけでは止めることができないからです。一人でも多くの道民に、そして大多数の国民に工事現場や工事予定地周辺の貴重で大切な自然があることを知らせ、山奥で進められる工事の自然を損なう様子を知らせることが必要です。多くの人々に知らせる活動は、調査研究、集会などの広報活動、などなど多くの人が関わり、そして多くのお金と時間を掛けるのですから大変な苦勞が伴うのです。

大規模林道工事の反対運動は相当昔から行われていたのですが、「土幌高原道路」や「日高横断道路」の知名度の陰に隠れて活動が広がっていませんでした。大規模林道は1973年に北海道自然保護連合が反対の調査などを行い、以後は大雪と石狩の自然を守る会が孤軍奮闘の活動を行ってきました。日高横断道路反対を勤労者山岳連盟が途中から単独で進めてきたのと似ています。

多くの道民、多くの国民に知らせる活動が始まりました。大規模林道反対は、2003年8月に日高横断道路工事を進めていた北海道開発局が工事の中止を決めて以後、北海道自然保護協会・ナキウサギふあんくらぶ・北海道自然保護連合などが反対活動を再開したのです。1月17日の北海道自然保護協会主催集会に続いて7月24日～25日に「2004年森フォーラム・北海道の大規模林道を考える」が旭川市内集会と大規模林道滝雄・厚和線現地見学会とが開催されました。

土幌高原道路は1999年3月、「私が当選したら道路は通す」と選挙公約した知事が自ら工事の取り止めを決めました。道路建設反対のための三者連絡会（北海道自然保護協会・十勝自然保護協会・北海道自然保護連合）を結成したのが1994年11月。この4年5カ月の間に全道各地において7回の集会が開催されました。多くの市民に北海道の貴重な自然を知らせる活動は、一度始まったら止らない公共工事を止めることができたのです。1999年3月17日、道の時のアセスメント最終政策会議の出した最終結論の再評価調書には次の要旨が書かれています。「近年における道民の環境保全に対する意識の高まりを踏まえると、・・・本道路の工事は取り止めることとする」。

大規模林道問題北海道ネットワークは次の団体で構成されています。大雪と石狩の自然を守る会・ナキウサギふあんくらぶ・十勝自然保護協会・(社)北海道自然保護協会・北海道自然保護連合。工事を止めさせるために、北海道の自然環境保全に関心を寄せるもっと多くの人々を結集しなければなりません。

(札幌市在住)



大雪と石狩の自然を守る会主催の2004年  
北海道森フォーラム 7月24日～25日

## 大規模林道開発現地を視察して

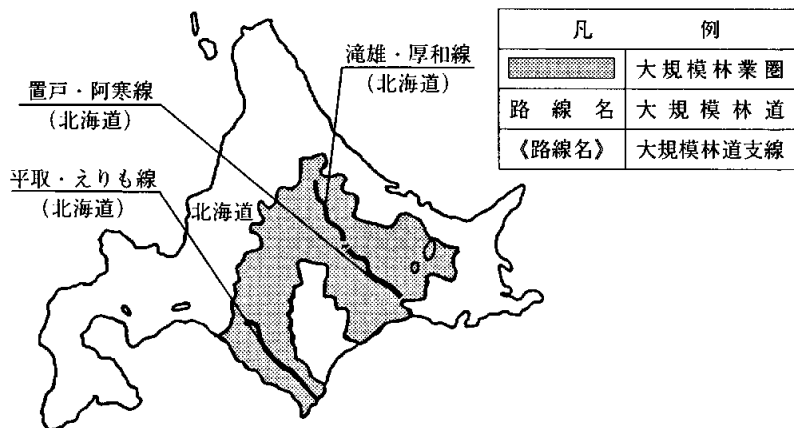
会 員 大谷 節子

北海道自然保護協会の今年度の総会で、千歳川放水路建設問題、士幌高原道路問題、そして日高横断道路（静内－中札内）問題が、多くの道民、国民の反対にあって一応中止になった今、道内で残る大きな自然破壊の工事の1つに、もう30年（滝雄・厚和線）もムダな税金を投じているものに大規模林道建設があり、それを中止させるためにすでにネットワークがつくられているので、大きな運動に展開しようという提起があった。私はそういう林道が3つもある事を改めて知って、国道並みの幅員を持つ林道を自然を破壊してまでなぜ建設するのか、必要性があるのか、自然破壊は・・・ぜひそれはやめさせるべきだと考えた。しかしその実態がどうも映像や写真だけでは把握できずにいた。そして反対という意志を自分の言葉でかみしめ他の人の同意を得るにはぜひ自分の目でその現場なるものを見たいと思っていた矢先、そういう機会に出会い、今回の7月24日～25日のフォーラムと現地見学会に参加した。現地見学会で見た状況で前日の鏡さんの「台風10号被害と大規模林道」というパソコンを駆使した今年の台風でひどい被害に拡大した平取－新冠間の林道の破壊説明が納得できた。そして私にとっての一番の大きなショックは自然の山並みを掘り返しそこに生息する動植物を根こそぎなぎ倒して、コンクリートで固めていく「破壊」工事のために、削り取った法面に、崩れ防止のために草や低木を植えつけ、根を張らせているが、その植物が全くそこに元来存在しない外来の植物であった事だ。しかもその見本をわざわざ示してあった。おそらく速く生育し、頑強で、繁殖力も強いものを選ぶのだろう。崩

れた土肌に肢を伸ばしてしがみついていたエゾアカガエルの姿や小さなエゾタツナミソウが忘れられない。これがまさに動植物の多様な生態系を破壊する現実で人目につかない所でそらぞらしい標識を立ててやっている税金の無駄遣いなのだ。

（札幌市在住）

大規模林業圏開発林道位置図（森フォーラム資料より）



止めよう！ 大規模林道

みなさん、大規模林道を知ってますか、  
 人も踏みいらぬ山の奥に  
 ヒグマやエゾシカ、シマフクロウ  
 森の先住の生きものを無視し  
 山には似合わぬ機械を入れ  
 森林を伐採、山を崩し地をならし  
 山の奥に国道並みの道路をつくる  
 一体、それは誰のため、何んのため  
 何年も何年もかけて工事し  
 何億という多額の税金を使って、  
 日本はそんなに裕福な国なのですか、  
 医療費を上げられ病院にも行けず、  
 年金は下げられ生活できず、  
 中小企業の倒産で失業者や自殺者が絶えず……  
 多額のお金を使って自然破壊をする国は、  
 世界中でも日本だけ？  
 豊かな自然を守るため大規模林道は止めよう！  
 豊かな生活を守るため大規模林道は止めよう！  
 みんなで止めよう！ 大規模林道

熊の糞

人も踏みいらぬ山奥の  
 大規模林道開発を  
 みんなで現地を視察する  
 行けば道のど真中  
 なにやらこもりある物体  
 近づいてよくみれば  
 それは、ヒグマの糞の山、  
 まるで、「もう、山を荒らすな！」と  
 抗議しているかのようだ。



抗議の熊の糞



林道開発で破壊される森林の現状



林道工事中の独立行政法人緑資源機構の看板  
 (北広島市在住)

## オーストラリアでの野生動物の研修に参加して

常務理事 奥谷 浩一

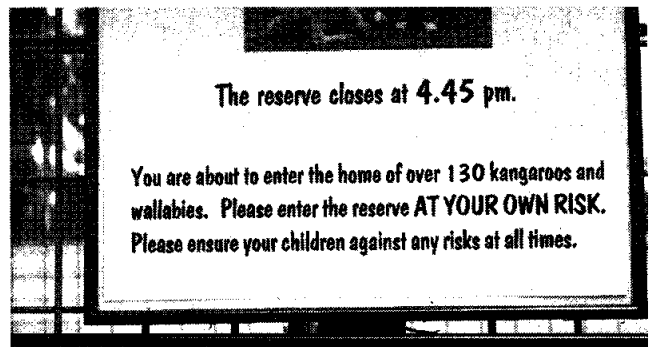
今年3月にオーストラリアで行われた野生動物にかんする研修に参加した。9日間という短い期間ではあったが、私にとって初めての南半球への旅行であり、固有の野生生物と生態系にかんして多くの知識を習得できるまたとない機会となった。

日本の20倍もの面積をもつオーストラリア大陸でも、およそ200年前に欧米人が移住して以来、持ち込まれた家畜やネズミなどによって、特に小型のワラビー類を初めとする多くの固有の野生動物が絶滅の危機に追いやられている。希少生物の密猟と密輸もまた大きな問題である。カランビン野生生物サンクチュアリでは、オーム舎の前にトランクとプラスチックの筒が展示されていた。説明文を読むと驚いたことに、それは密輸者が希少種のオーム類をこの筒に入れて動けないようにしてトランクの中につめて持ち出すための装置であった。金のためには手段を選ばないおぞましい人間の性を見る思いがした。

ブリスベーンにあるキーンズランド大学の獣医学部と海洋生物学部では野生生物にかんする講義を受け、傷病動物の治療施設を見学したほか、付属のコアラ研究所でも研修を受けた。特に感心したのは、獣医学部の治療施設が日本の獣医系大学や動物病院ではまだ少ないと思われるCTスキャンの装置（日本の日立製）を初め、傷病動物にたいしても人間並のきわめて行き届いた施設を持っていることであった。そして見学したどの動物公園でも、必ず付属の傷病治療を行う施設があり、専門の職員が忙しく働いていた。

最大の印象は、ブリスベーンの沖合いにあるモートン島の砂丘地帯を探検した時と、シドニーから車で1時間ほど西にある世界自然遺産のブルー・マウンテンをトレッキングした時のことである。2度ともガイドから「免責同意書」なるものを渡され、署名をさせられたのである。「免責同意書」とは、探検やトレッキングの最中に生ずる事故にかんして、ガイドとツアー会社はできるかぎり事故が起きないように努力するが、個人の責任で生じた事故にかんしては責任を負わないとする、いわゆる自己責任の承認を求めるものである。ローンパイン・コアラ・サンクチュアリでも、放し飼いにされているカンガルーのエリアの入り口の看板に、ここに入ってから自分自身でリスクを負うべきことが大きく記されていた（写真参照）。この同意書は、いわゆる「自己責任」という考え方にもとづくものであって、過剰管理を避ける意味でも、欧米では一般的であるが、我が国ではほとんど普及していないものである。我が国では、官僚丸がかえと官僚まかせとが不可分に一体となっていることから生じる「管理責任」がしばしば過剰管理の弊害を生んでいるが、これを避けるためには、我が国でもいずれはこうした「自己責任」の考え方を導入しなければならない時代がやってくるであろうと思えて仕方なかった。

(江別市在住)



Feeding the kangaroos  
is as easy as 1. 2. 3

## 夕張川なんでも探険隊

伊達 佐重  
(常務理事)

発足したのは3年前。1858年の「夕張日誌」の道すじをたどって松浦武四郎の歩いた個所をバスツアーでめぐったことが結成のきっかけになったような気がする。企画した行事の時に、数人の世話役で決めた要項を小学校に配って応募者をつのるといふ、おっとりとしたやり方である。

最初の行事は、由仁町川端の奥地にある無名の大滝を探険することであった。下見で高さが3～5メートルのきり立った低い滝が3つあることがわかり、ロープと縄ばしごを準備した。本番の日、5人の小学生はガケ登りの緊張に耐え、ひたいに汗をにじませていた。いよいよ目的地。20メートルもの見事な滝を見上げる子供達は満足そうである。流下する水を背に記念写真におさまる。夕張川まで下って水生昆虫を観察したり、魚釣りやゴムボートに挑戦して1日を過ごした。

2度目の行事は、本年7月のゴムボートによる川下りである。世話役自体は昨年の秋にそれを体験済みだったが、直前になってアウトドア教室の講師から「水量や川底の変化を考えると、危険回避のためもう一度下見をすべきである。」との助言を受けた。

多忙な人達ばかりだが、2日前にやることになった。

いよいよ当日。小・中学生8名、成人12名が多良津橋から夕張橋までの約8キロのコースにいどむ。5そうのゴムボートに分乗して岸から流れに押し出す。1人が浅い所からボートに乗り込む時、体重のかけ方がまずかったのか、いきなりぬれぬずみ。途中の岩だらけの急流でも2人がボートから落ちたが、救命胴衣のおかげで笑いながらはい上がっていた。

来年の行事は、夕張川とどう関連させる内容にするのか思案中である。(栗山町在住)

北  
海  
各  
地  
の

## 「カムバック里海」

木村マサ子  
(会 員)

函館市内の公園緑地の巡視や函館山での観察会や案内の仕事をこの3月に辞めて、生まれ育った漁師の生活に戻ってみた。といっても本格的な漁師ではなく、波が打ち上げた海藻をを捨ったりするものだが(許可必要)、私は自然と向かい合って生活している漁師が好きなので、そんな生活をしたと思っていたからである。

野山で緑化運動や環境保全活動に長いこと携わってきたが、久しぶりに浜においてみると、日ごろ出かける機会の少ない海ほどその運動の関わりから遊離している所はないようだ。

浜には流れついたゴミだけでなく、遊んで帰った人たちの残したヌードルや弁当の空き箱、ナイロン袋などが、毎回行く度に新しいものが岩の間に押し込まれてある。潮が引いた磯では、何処からか人が車でやってきて、食べられる海藻を採集時期に関らず採って行く。夏休みには、家族連れがきて岩をひっくり返してツブ貝やカニを採って持帰るばかりか、ひっくり返した岩はそのまま放置してある。だから磯浜は、川原のように白く綺麗だ。つまり、海藻は育たず、小魚や小動物の棲み家がすっかり壊されているのだ。

もっと驚くのは、テコやツルハシを持ってきて土木工事並みに岩を倒したり砂利を掘起こしたりして、釣りの餌を採っている専門家もいることだ。

山から流れ出た水は、平野を通り町の中を通り海に流れ出るように、環境問題は普段の生活の中で、全ての関わりで考えられるような人たちを増やす活動にしなければと痛感している。そして、コンブが足に絡まって動けなかった、昔の海に戻したいものだ。(函館市在住)



## カラカネイトトンボの生息する小さな湿原を守って

会 員 原 島 和 子

カラカネイトトンボは、体長2～5cmの<sup>カラカネ</sup>唐金色の小さくて可憐なイトトンボです。札幌市内では、北区の篠路福移湿地にしか生息していません。3年前「周辺開発進む札幌篠路福移湿地」の記事を読みました。この湿地は20ヘクタール弱の広さです。この一帯は約4000年前頃に形成された広大な石狩湿原の一部で、ミズゴケ群落を基調とした北海道でも大変貴重な湿原です。この湿原にはカラカネイトトンボの他にゴマシジミ、オオタカ、チュウビ、オオジシギ、アカモズ、エゾトヨミ、オオミズゴケ、タヌキモ、ヘイケボタル、北海道では珍しいアオヤンマなども生息しています。ここにあげた昆虫、鳥、魚、植物は、みな準絶滅危惧種或いは絶滅危惧Ⅰ類、Ⅱ類のもので、このようなすばらしい貴重な湿原を是非守っていきたいと思います。

## —札幌篠路福移湿地保全のお願い—

「カラカネイトトンボを守る会」は1996年結成され、今年7月、NPOに認可されました。登記をすませ、湿地の存在を広く知ってもらうために、テレビ、新聞などにとりあげてもらいました。

そのおかげで、この湿地の土地を手に入れていた留萌、奥尻、札幌の地権者より寄附をしたいと申し出がありました。(湿地は原野商法の土地で全国に300人の地権者がいる。)

私たちは、札幌篠路福移湿地周辺の開発がすすむ一方で、湿地から近くの当別町美登江へ「茨戸川とんぼ学校」と名づけ、湿地の生物を移す活動やピオトープづくりを地域の人々と一緒にやっています。「篠路福移湿地を湿地公園」とするため、今は、10ヘクタールと湿地は半減しましたが、土地を買いあげ、ナショナルトラスト運動で、湿地公園として保存する考えです。そのため、地権者の連絡や、湿地を地権者から寄附・借り、買いあげるための寄附を全道の皆様をお願いしたいのです。

よろしく御協力をお願いします。

(札幌市在住)

## 振り込み先

郵便局口座番号 02790-7-44699

口座名 カラカネイトトンボを守る会

## 連絡先

大山 衛門

札幌市北区あいの里1-6、2-2-214

TEL・FAX 011-778-8353

## 寄贈図書紹介

「スポーツ倫理の探求」 富 樫 均 氏より

近藤 良亨 編著、大修館書店



## 佐藤正秀理事を偲ぶ

俵 浩 三

去る8月17日、佐藤正秀理事が急性心筋梗塞のため急逝されました。

佐藤さんは北海学園大学を卒業後、苫小牧の会社に勤めながら、野鳥観察、自然保護に興味をもち、故三浦二郎先生（当協会副会長）の教えを受け、自然観察指導員、鳥類標識調査員（バインダー）などの資格を取得、1994年から協会理事に就任、自然保護活動に尽力されました。とくに毎年の自然観察指導員講習会では、講師として野鳥などの観察のノウハウを多くの人に伝授、また協会が行なう現地調査では、愛車を提供して各地を駆け巡りました。8月始めにも千歳での現地調査があるため、佐藤さんはその下準備をしているさなかに、体の不調を訴え入院されたそうです。

佐藤さんは温厚な性格で、研究熱心、野鳥などの知識は奥深く、また何事にも用意周到で、自然観察や野外活動の小道具、高級カメラなどを愛車に積み込み、臨機応変に使いこなす特技には、多くの人が恩恵を受けました。勤務先が開発系の会社だったので、本



寄れば野鳥の話に花が咲く、在りし日の佐藤正秀氏(右) (左は大館氏)

務と自然保護ボランティアの両立には、人知れぬご苦勞があったと思いますが、当協会としてもかけ替えのない理事でした。つい先日まで、お元気な姿に接していただけに、佐藤さんの急逝は、いまでも信じられない思いです。享年55歳。高齢化社会といわれる現在、若すぎる、まことに残念なお別れですが、謹んでお悔み申し上げます。

## 活動日誌

### 2004年7月

- 2日 トナム地区高規格道路視察調査
- 5日 道庁担当者エゾシカ問題の説明で来所
- 14日 拡大常務理事会
- 16日 平成16年度のエゾシカ捕獲の禁止及び制限に係る公聴会（公述）
- 17～18日 大規模林道「えりも一様似」現地調査
- 24・25日 「森・フォーラム」旭川・大雪クリスタルホール
- 26日 平取ダム問題打ち合せ会議

### 2004年8月

- 1日 千歳川長沼頭首工現地調査
- 2日 「北見の自然風土を考える」市民連絡会代表、事務局長来所「北見バイパス問題」で話しあい
- 21日 平取ダム打ち合せ会議

### 2004年9月

- 13日 拡大常務理事会
- 15日 夏休み自然観察コンクール作品応募締切り

## 講演会

海鳥を守るために私たちができること

- ◆主催 北海道海鳥センター友の会札幌連絡会
- ◆期日 10月23日（土）午後3時～5時
- ◆場所 札幌学院大学社会連携センター3階  
（札幌市中央区大通西6丁目  
☎011-280-1581）  
地下鉄大通駅1番出口より徒歩1分  
講師 小野 宏治氏  
（北海道海鳥センター研究員）

## 要望書など

### ■2004年7月26日

シマフクロウ生息地保全に関する要望書  
環境省大臣宛に提出

### ■2004年8月3日

「世界ラリー選手権」道知事に申し入れ  
（上記いずれも4団体連名）

## 新会員紹介

2004.4～2004.8末まで

【A会員】降幡 行雄、牧 賢吾、石岡 六美、  
磯部 光宏、伊藤 信行、小田桐 学、  
尾身 建夫、貝澤 文俊、上出 久雄、  
今野 善行、坂本 清司、東海林雅志、  
高坂 道雄、長岡 晴道、山上 正一、  
浅井 和代、阿部 美子、石岡 真子、  
大口 弘美、高屋 博江、鶴屋 光枝、  
原田久美子、渡部佐江子、林 友行、  
三崎 篤

【B会員】大口 直道

## 寄付金

ありがとうございます。

松野 誠也	4,000
小林 栄二	4,000
斉藤 紀	10,000
故佐藤理事のご家族より	30,000

**\* お知らせコーナー \***

札幌学院大学社会連携センター

**市民講座『北海道の野生生物の保護を考える』**

現在世界の野生生物はさまざまな人為的原因のために有形無形に追い詰められており、一見自然が豊かに見える北海道でさえも例外ではありません。この講座では、北海道の野生生物が今どんな危機的状況にあり、人との共生のためにどんな保護対策が求められているのかを、市民の皆様とともに考えます。

日程

- (1) 10月15日(金)「あなたはバードストライクを知っていますか」  
小川 巖氏(エコ・ネットワーク代表)
- (2) 10月22日(金)「オロロンプロジェクトー天売島の海鳥を救えー」  
小野 宏治氏(北海道海鳥センター研究員)
- (3) 10月29日(金)「北海道・花たちのほやき」梅沢 俊氏(植物写真家)
- (4) 11月5日(金)「コウモリという生き物」  
河合久仁子氏(北海道大学低温科学研究所生物多様性グループ)
- (5) 11月12日(金)

「自動撮影による中大型哺乳類のモニタリング」平川 浩文氏(森林総合研究所北海道支所森林生物研究グループ長)

時間 各回18:30から20:30まで

受講料 5回で4,000円

場所 札幌学院大学社会連携センタービル  
 (札幌市中央区大通り西6丁目 地下鉄大通駅出口1番徒歩1分)

問い合わせ/申し込み

札幌学院大学社会連携センター  
 (TEL011-280-1581、FAX011-261-1230)

**自然保護連合の現地視察と交流会**

- 期日 10月16日(土)~17日(日)
- 場所 十勝、新得、本別、足寄、阿寒
- 主催 北海道自然保護連合
- 主題 「地域の環境問題」  
「十勝の森林は今～林道ラリー問題と大規模林道・阿寒-置戸路線」
- 集合 13:00 トラムウシ登山学校前
- 申し込み 十勝自然保護協会 佐藤  
TEL・FAX 0155-42-2192
- 費用 宿泊費含め 3,000円  
車は各自、一部きびしい所あり  
※当協会でも申込受付しています。  
会員の参加、大歓迎です。

**協会のホームページ**

<http://www.jade.dti.ne.jp/~nchokkai/>

協会では、会誌やNC(会報)の他に、ホームページでの活動報告・意見募集も行っておりますので、ぜひご覧になってください。会員の皆さんには、協会宛に直接の手紙やホームページ上の意見欄にご意見を寄せていただくことを願っております。

**会費納入のお願い**

会費納入については日頃ご協力をいただいておりますが、未納の方は至急納入下さいますようお願いいたします。

個人A会員	4,000円
個人B会員	2,000円
(A会員と同一世帯の会員)	
学生会員	2,000円
団体会員 1口	15,000円

〈納入口座〉

郵便振替口座 02710-7-4055  
 北洋銀行大通支店(普通) 0017259  
 北海道銀行本店(普通) 0101444  
 札幌銀行本店(普通) 418891

〈口座名〉

社団法人 北海道自然保護協会

※ この紙は再生紙を使用しています。

